

# 滑誓乃化百人一首

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5

天智天皇  
あきれたよ。程々な物はない  
我小供等にはろをさせつ  
持統天皇  
春過て夏となりけりしらたへの  
石炭酸でソウジヤ一山  
柿木人麿  
仰向て大きなひきかきながら  
長がくしくも娘妓責め  
遊園へ入見れば朝きよめ  
門の敷居に雲はふりつ  
安條仲康  
あくまから只一口さ喰つて  
三日月形にのこる餅かも  
喜撰法師  
若旦那に上り書生して  
世のうじ虫さ成るなり  
衆九大夫  
干松がこめさるる其の場にて  
聲きく母の忠告かなしき  
中納言家持  
片輪者たる橋敷おかの氣で  
拜むを見ればあわれなりけり  
小野小町  
顔の色はかわりにけりな色男  
親に動常なく泣かれず  
これじやこの勝つも負るも  
毒ふせて知もしらぬも持上た連  
參謀無  
かゝの腹矢野無性にふくれ出し  
あなな故じやこらむつらつき  
眞正照  
小便を桶の上からやりかけて  
船の来るのでしほしごめん  
藤原成院  
さす將軍あまり相手がよければ  
負るつもりで勝ごなりけり  
河原左大臣  
みならぬ事のささみや淫賣の  
見張りをするは二世の御幸主  
光孝天皇  
君が爲は此處まで出て来たに  
杯一位あるももうて見よ  
中納言平  
たれあらふ伏見宿衛のふる狐  
その年さくば山に千年  
藤原成行  
黒染の衣ばかりのさ坊主  
小僧のあたまた常にはららん

在原兼平  
すわて屠る藝妓の腹は立田川  
ボテくれないて手を握るこは  
伊勢  
難波なる邊邊村の都落  
幸て此世を過してよこや  
素性法師  
今来るさしし言葉を力にて  
僅の酒をなめて居る哉  
元良親王  
かさかいて足が立たねば賢する  
眼がぶれたら按摩さぞ思ふ  
文屋康秀  
ふくらに御客が顔をしかわれば  
買ひ氣あらし忌味いふらん  
大江千里  
酒見れば喉が鳴れども詮がない  
我身ひびきに客にあらねば  
菅家  
此度の壯士芝居はナンジャイヤ  
三條右大臣  
なにしお大法螺吹の大山子  
人に喰われてクローの音も出ず  
貞信公  
お天氣調りやこなつて御言  
今一人のふのけ待たなん  
中納言兼輔  
ぬか味噌の茶碗ながら、難水も  
隣のものはおしおしかるべき  
源宗干  
釜火は奇麗にするがよかりけり  
我喰ふ飯をたくと思へば  
凡九郎頼朝  
心あてに行かばや行かん東京の  
様子は更にしら菊の花  
壬生忠実  
ありがたし此うなみくし頂いた  
杯ばかりよきものはなし  
飯上是則  
足にはくももあるやこ店頭で  
ひねくりまわす釣れる白シヤツ  
春道列樹  
屋根はも借金かき子はふえる  
泣かれもされぬみじめなりけり  
紀友則  
膝掛けをふり込んだる人車挽  
提灯股に居眠りする  
藤原興典  
朝露は消ゆるばかりそ筆せば  
勝つが常然日の出る國

紀貫之  
まちがいで相対つた土百連  
衆さ無性に高くなりける  
清原深養父  
別嬪の白き大窓のちもれぬ  
衆の仙入落て来るらん  
文屋朝葉  
色里に捲く大見舞は  
つらつら見せぬ玉ばかりなる  
右近  
我ばかり進んで居れば足は足る  
人の命がどうならんふこも  
參議等  
ありあまる金はいらぬさいふ金が  
たればはせ九人のきたなき  
平兼盛  
しらべは實は吐きけり悪い事  
出来ぬものか人の良心  
壬生忠実  
收賄の請状バツト立にけり  
人しれすこもらい受しが  
清原元輔  
契りたる債を全額いふこにや  
末に手紙をさけて見せませ  
中納言忠忠  
味ひ身て此方の土にもれば  
難波は足さと思はざりけり  
中納言兼光  
行燈の消してまへはうろくこ  
瘰たる痛めが起上るらし  
兼盛公  
上れども御堂盆へ出さるるに  
手をポン／＼鳴らすべき哉  
曾根好忠  
漢口を明て番頭へ行けぞ  
一度もしらぬ家の御主人  
東藤原法  
やけくまで散財する衆まがり  
人こそしらぬ穴はあきけり  
源重之  
眉をくも重をいたわる女子が  
くだけて物を思ふ明らな  
大中正行  
水鉢なる床に字を書き標表が  
頭押へて物をこそ思へ  
藤原兼光  
掘り見て御堂盆づる下敷が  
長くもかなと思ひける哉  
藤原方  
角と我軍はつて向ふ兼盛  
さしてやらふと横柄な口

藤原道信  
雨降ればらめしものこそ知をら  
御うらめしき角力入掛  
藤岡三司母  
ひるれ行く中の中歩行まは  
今日を限り命しめる哉  
大徳道綱母  
中に居る御所の外で尻りて  
如何に久しぶりとのしる  
大納言公任  
吉備郎子たへた誇りまければ  
まだ流して喰ひたがりけり  
相模式部  
有たけの身代つた大徳日那  
只一度も相場所たない  
紫式部  
擇合て見しや夫ごもわらぬ中  
動き出しけり急行の流車  
大貳三位  
ありがたや勿体なく我生し  
親の姿をわすれやわする  
赤染衛門  
矢の如くふる夕立の雨の中  
あわてふためき馬の飛散  
小式部内侍  
大方はさのまより東なり  
まだ海も見ず木曾の百姓  
伊勢大輔  
いにしへの奈良の筆屋が殺されて  
今日此邊に迷ひ居るらな  
清小納言  
手三足をもんで眺まがやまが  
世に強盗の罪はゆるさじ  
右大臣道雅  
これは又大事だぞ、源隆の  
押石持上て、御言るな  
藤原道隆  
朝酒を呑だ納言まよふんこて  
あはれ出したる鏡のない奴  
相模  
實に来る停車場内の兩人が  
龜にビールと呼ぶふり多けれ  
前大僧正行  
諸事にあわれと思へば化院  
假名より外に知る者もなし  
扇防内侍  
御節も筆で削るは不経済  
鏡でもいんそれかやあるふ  
三條院  
心にもあらぬ縁談をした妻を  
あへしたがりてばす愚痴らな

能因法師  
嗚呼坊主の坊主を譽めれば  
喝罵包みし鐘なりけり  
良蓮法師  
さびしさに床を抜出がむれば  
いづみの部屋も何らむくれ  
大納言兼光  
云事は無難なれどベチヤクヤヤ  
口の軽やに秋風ぞ吹く  
祐子内親王家紀伊  
音にさく高田の馬場の仇討は  
三度とこらりこれ十邊  
權中納言匡房  
高松の千金丹もさるるない  
富山の薬これもさるるない  
源俊賴  
うらりける頭をグチになられて  
禿が出るこはイヤな事だよ  
藤原兼光  
仕舞をさし衣服も質に入  
あわれ大切の娘賣りけり  
法性寺入道前關白大政大臣  
人の腹叩いて見れど政者は  
何の腹叩いて見らしらない  
兼盛院  
瀬戸物をくたいた小供湯出し  
破れたらけり合せてぞ見る  
源兼昌  
あななモン通てこりし酒の掛  
更らに拂はにやすまの事だよ  
左大臣大顯輔  
明て見ん貰ひし鐘のやれ日より  
もれ出る蜜柑色のさやけき  
待賢門院源光  
泣て居る心もしらす大の  
耳すはめるは物はしほき故  
後徳大寺左大臣  
居座にならば血を吸ひれば  
只だ一切の豆腐のこれる  
道因法師  
おもいらく儲けり不仁にやけて  
金故ひかる阿彌陀うりけり  
皇太后大天女後成  
世の中の流車や流車の増し  
山の奥まで生魚喰ふ  
長管で又よくさし出され  
體にまかれし人そをかき  
世の中は廻り行燈自由だの  
民徳などは流行らざりけり

西行法師  
なげくもたん／＼月の重なりて  
善慈吐息目になみだ哉  
兼盛法師  
色もる品賣つた道徳に  
木につくつて商人の口  
尊賢門院別當  
なにななる千日餅の經業師  
身を過しよに世を渡るべき  
式子内親王  
たまに來た顔を立ててこ  
金借が心にもな弱音を吹く  
嚴島門院大輔  
眞價はやな四十七士の決心を  
腹切る迄も色はかわらぬ  
後京極攝政大政大臣  
じり／＼し手しむたたる寒き夜に  
鉄砲片手に立ちし番兵  
一條院兼光  
吾輩は宿屋住居の御身物  
人こそしらぬかの間もなし  
鎌倉右大臣  
世の中に種々の波世もあるけれど  
見で喰ふ人ぞかなしき  
參謀兼光  
皆様の便利に建てし野雲  
其八口に、蓋を釣りけり  
前大僧正兼光  
おあがりさ御客の前さつたる  
茶盆の上、梅漬の皿  
入道前大政大臣  
はなしてさく一体の智慧ならで  
瓜喰うては木賣なりけり  
權中納言定家  
此れも亦法法れば是非もなし  
穢くやべすとりの出し村々  
正三位家隆  
感言引るやらの諸君よ氣を附な  
四百四病のこははじまり  
後鳥羽院  
一ツ金二ツも金三ツも金  
その金故ひ若勢する世ぞ  
順徳院  
橋本が三年梅は八年なり  
女子は十三規則なりけり

